

里見八犬傳

第四編

卷之三

13
709
18



門 13
號 709
卷 18



明治三十九年
十月九日
購

南總里見八犬傳第四輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第二十五回

念玉戲小笛成借る
妙真哀と婦を返す

小文吾ハ粥を再燗く。これを信乃ハ勸る折高女ハ呼以々裡面ハ入る。あまけまふ心もあざと立とる。障子を磔と引閉く。店前ハ走出と見まはる。是別人ある。鎌倉の修験者念玉ハ左ハあつと大見する。梭尾螺を携る。右ハあつ。濃漆の扇りて。内月のあつ。成何あつ。店行燈のほろり。小坐。小文吾をこんく。うち微笑。取目今。還り。扱も。昨夕の神輿洗ハ。い倍。熱鬨。果の比。彼此の俠客共。角巻ハ殺風景。何國の浦。壯者の公ハ。武速進雄の神慮。寔ハ測。里。今朝。還。と

八犬傳白話集卷之三

山崎書局

誰かろう措遺まらるのふそとのみ間小念玉ハ膝を進め臂を伸し件の
笛を搔よむ袖のく拭く歌口を澤しく梵論こと吹試是はいつ死
尺八その主定うるも今宵一夕和殿小借人寝るより外ふも
る旅宿ありと甲夜の間より惘め入る蚕の腹を肥さんわまり小奥
なり。あも今宵ハ庚申あり。扱ともこと今日徒然と尉のそ九竟のあ
あん遊まらるる月とるべし。いづくとのひりく笛を携り身を起せ小文
吾ハこもわん外の随意慰め又その尺八を要あり。と回答て軀く遠く
燭を秉り程を行燈を引提り念玉を別室小安内し。預りる行李ま
とを運よと舊の処小才のあつても嘆息し腹裏小あやう。搦り加
彼修験者ハ今宵の六伯ハ影護し。さざと今更小出りかぶ死術も
より強顔のひりりも他知へ程さ疑えん渠尺八を吹遊まらる夜と共月を

俟ハこの心あてのる飲させ悪心ハわむとも密事を知り身の仇ハ刺殺
しく口を塞んその機小臨も亦小忘れどもかもささどせんさる病臥せし
奥より人のうらりり。壁ハ病難のそり命小恙あむ。稻塚にて帆大夫ハ
諾ハるの目ままで。いひ返さぬ。遍の難題その折小慮され。骨相圖
工を心憎く。嚮ゆいとも慌しく口ハち披死のそり復よく見やと
懐へもさう入る。あはふと左右の袂を搔探り。衣領を披死。振へも涙
紙さへもさうけり。原來途まら遺せり。夏ハ衣物の薄く。黄昏時のいと
せり。走り還り。彼知より。遠くもわらぬ程。鈍まり。かり死。遊
莫要る死物。惜び死あむ。も尚途ゆ。人ハ拾と訴ら。疑ハ
のそ吾侪小係。門より内よわむ。とそり隈多く立遠まら。むも校尾
貝小足踏み。仰さる。輾ん。と推駐。よ。何ぞと取わけ。うち見て

五三
上巻
下巻

更ふ奥をえんりのあま不覚へ旅修験が笛を愛つての貝とそを倭ふたりと志と
 けり。譬はこの梭尾貝の海中のく生るるとはれ運動するのこ声をやつとそ
 肉を私に般を笛め死物とよつて吹るまがその声数町の外までやゆ人の
 うも亦如此その居を失ひて他郷に浮浪するのの鱗々の水を離れ
 帰るふりもそれと似たり。况罪をうりて沈落し隠すとと人ふて知らず
 声るを貝の吹きてその音のやゆり如く且罪をを罪するのその沙汰の逆
 なるのその罪をて外口を稟る威勢小厭するの順へ禱る験もそれ世ぬ
 果敢るめ然とひ白くむりそり山伏の萬より禱る名のふく
 順逆の峯より霽る雲もゆりそりゆせん。こをるふ會する貝を擲ちて眼を
 睜り氣と龍と言ふ出るなげのどく。苦し死胸の當るものやうと死へ恨え
 かくてむるれぬらうとそり又骨法圖を索んとく。遠く紙燭とく門邊のわん

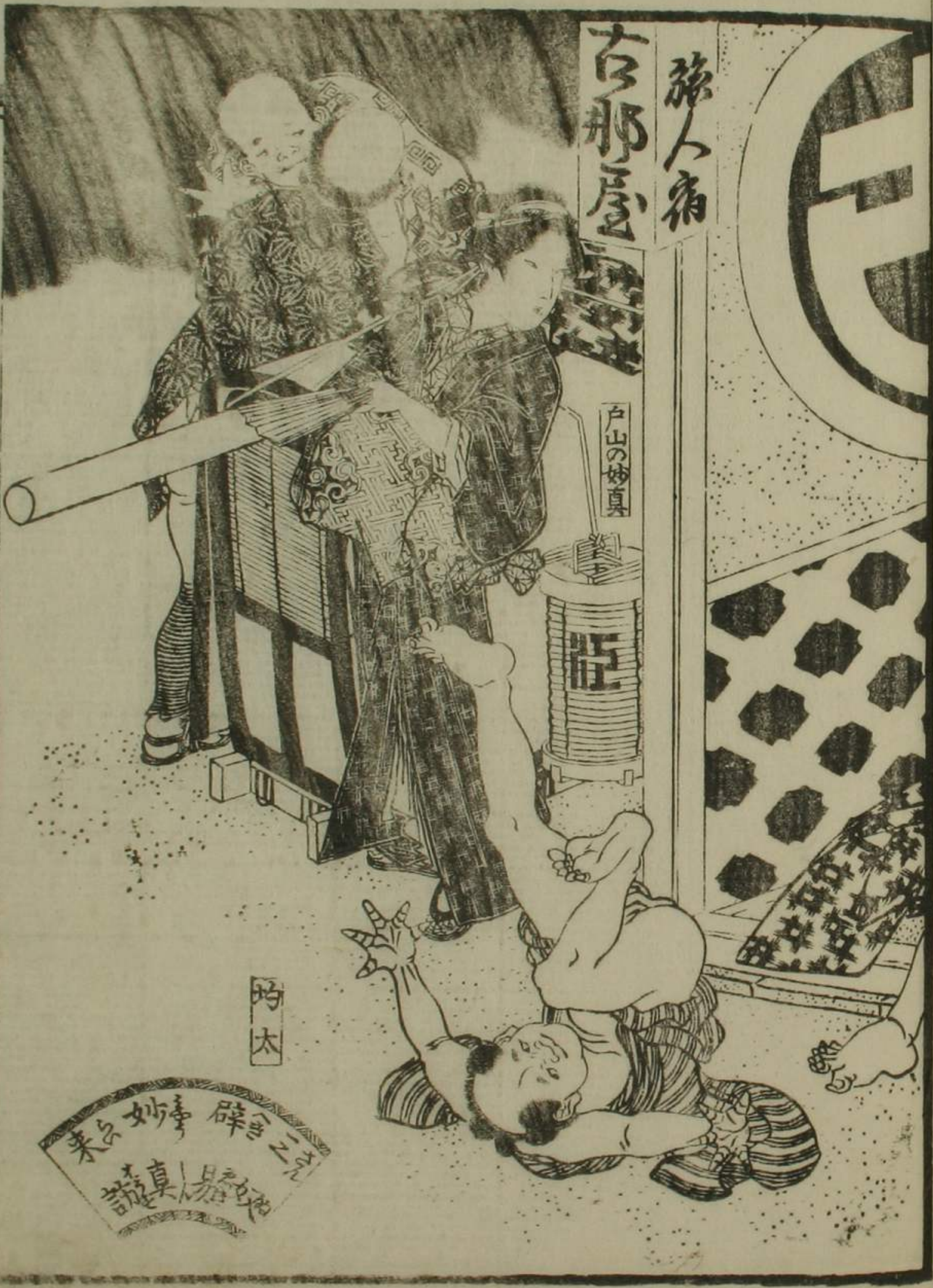
程ゆ皆とく来りて外向の器一く呼うけと樞戸襤と推して関取在り飲と頼
 らう。塩漬の鹹四郎を先より下り板扱均太牛根五六と呼はる。土地小
 名する破落戸。五人齊一店前る。板席ゆ推並べ小文五へん。紙燭を振
 滅し。こ氣立し入るま。こ入揃う。何支を志づふ坐とよ筆子が扱んとひ
 せも果に鹹四郎の杖凶と肩小投り。関取今宵へ此を。物のつんとこ
 佛が臺座をともて来迎せり且録小居と拜と。といは均太を傷
 鹹四言吐むもあま一番地取の夜替古小二人のやうに肩を入ると林示
 估とんえま五六も亦進み出関取斯皆うち連拉て牙つる別の譏ふあ
 年来和主が弟子といへども根が技もよ。地力ある吾們るま。彼此の相撲
 怯を取も。大田の現る弟子をのらぬと人が言ればものう。和主の鼻を高く
 まいどげふ一目でえ限り。こく浮世の倒さま。門弟達を師匠を破門

そのおをいらんとき。この二人の摠名代今よりよくこの葛飾の和主の弟子へ一
 りも形。さうあろのよ。頭高小口を利おそ。忘さうとく。悦物ろ。諸
 声。諸胡坐。嘯け。取。蚊を打。膝。拍子を。小文吾。や。冷
 笑。ひ。あ。味。奴原。が。さ。る。物。を。い。ら。ぬ。軟。総。角。の。時。より。く。こ。も。相。撲。を。好
 ろ。く。久。閑。取。ま。ど。の。つ。ま。と。も。世。こ。ら。ふ。も。わ。き。ま。定。小。田。舎。の。素。人。技。弟
 子。へ。あ。ま。と。も。又。ま。く。と。も。吾。侪。の。物。を。缺。べ。く。情。由。ご。ま。立。へ。面。り。望。小。任。く。破
 門。せん。その。情。由。を。い。ら。ぬ。と。同。へ。入。へ。膝。立。る。ほ。い。ら。ぬ。も。知。さ。う。と。う。さ。う。
 昨。夕。濱。里。の。拍。擇。を。和。主。が。ひ。り。り。截。判。れ。る。適。俠。者。と。さ。う。は。似。と。山。林。小。ま。え
 と。且。了。葉。崎。の。乃。体。間。道。と。も。送。ふ。ん。ん。人。と。る。人。の。風。聞。の。千。里。を。ま。へ。世。の
 中。言。誰。と。く。ま。ぬ。の。も。け。泥。騰。揚。と。踏。ま。る。師。匠。の。弟。子。の。面。汚。く。さ。ふ
 よ。り。破。門。ま。る。そ。成。朽。を。と。さ。つ。と。さ。敵。の。ハ。正。く。妹。夫。借。財。で。も。あ。る。軟。子。さ。ま。ま

さ。ま。ま。く。る。ほ。阿。谷。と。と。猫。の。糞。踏。ま。く。花。の。周。め。の。路。傍。の。独。腸。の。和。主。へ。門。の
 腰。脱。犬。田。畢。竟。八。幡。の。取。組。小。あ。づ。り。團。扇。へ。怪。我。の。功。名。駭。要。の。時。山。林。小
 ち。も。足。も。か。ぬ。藥。罐。の。湯。煮。章。魚。真。赤。よ。ま。る。ま。て。も。恥。知。と。陰。囊。と。り。さ。ふ
 敵。や。突。と。成。ら。ぬ。舌。を。啖。ま。と。訓。声。高。く。い。ら。り。異。口。同。音。小。向
 火。を。焼。つ。と。小。文。吾。ハ。騷。死。る。氣。色。あ。く。あ。復。く。も。い。味。杖。揺。ま
 羽。と。搏。大。鵬。の。志。を。知。さ。う。共。音。小。轉。群。雀。小。囁。賂。を。養。る。と。ま。こ。小。の
 わ。さ。と。研。木。崎。ま。く。房。八。が。敵。小。あ。づ。り。親。の。為。が。為。彼。ホ。夫。婦。が。為。負。ま。る
 勝。ま。ま。と。あり。道。理。を。さ。ぬ。白。徒。を。避。く。通。と。の。羞。あ。る。彼。を。あ。ら。む。小。松
 せ。と。挾。さ。る。め。の。あ。づ。り。五。身。小。絶。て。痛。く。も。情。由。ご。ま。付。け。要。へ。の。い
 と。く。邁。と。追。ま。る。二。入。齊。一。身。を。起。し。邁。と。の。い。ぢ。も。去。さ。う。ん。や。師。弟。の。因。を
 ま。く。ま。ま。て。も。この。一。郷。の。面。あ。せ。る。人。の。口。め。戸。も。建。ま。る。後。日。の

てがごのぐりええと。鹹四郎が肉を巻と共小足を置みく筋斗を打。續く
形小極印打んと。鹹四郎が肉を巻と共小足を置みく筋斗を打。續く
萬る孟六と均太が腕を換揚と起んと春蟬鹹四郎が背を楚と踏居ま二
人の足と翔け面を蹴めつ天うち仰だぬる疼痛や腕が抜ん放せくとを
り小共音小弱る鹹四郎。かゝるためんつ大の字小身と平めうて眼を睜り
わろ苦したる堪ろく人ともわき目子が飛も出るがいつ小せん背骨が折
ると叫びぬむおのが名小の塩辛声敷板嘗と喘を多小丈吾ももを
わめめと懲せし隨小を緩めど奴原骨小あえ一奴奴成刃心づ親の戒人
の表を林示るのこまうう巻成抗る小あをど是よぐの奴が小一度の許さく
ゆけと二三均太を推遠ろくひとよよ外へそが俣撲地と突空せが
三間わまると跟くと走跌免轉輾びろ又鹹四郎を引起ろく項を廻く推落
すバ糾もろが如く爪走ろくわろわろを小倒もろ比皆具ハるも起む狐の如く

あやぐん久々猫の如く背を高くろく。中うろく小起るなり或はみづろく脈を診せ
或は腰を摩沙半膝頭小唾を塗ろく口を咄め眉根とをせ此彼等く息と
吻免込小ゆる成掖拭くやと諸声小あぶ鹹四郎の菴の籠小啼く如く
舌うち鳴ろ。均太五六疼へ去ろくや。俠骨を磨けがわろくもの四訓へあれど
利生いる。間のこまうと吐け二人の俱小嘆息。循環がろく負七難八苦安
婆の厄力小肩ても口小勝りぬれろのいあわどもいつぬのい小外飲の地酒
二斤が氣とるなえ弱るころと慰めろ均太の腰を搦撈ろろる遠くこん
かろろろ等々玉を送ろく。この小間小五六も足小踏ろく。透ろくろく小
ござると連緡錢二百遞与せ引提ろ誘とく先よこら腰を反ら折んち
つれ拉く野干玉の夜のどか味酒屋三輪の杉の葉葉せ。馴染の店を投ろく
足音絶て寂寥たり。小丈吾の行燈の戸口を中と推向ろ。外小をこりて



換々笛を今を吹く別室も近きありと。隠れぬぬの物の音の慰心かせと
 ありくゆかの憂を添ふの。現さまくの浮世ごと。むらうひよあまのひあひさ
 ぬと子舎ある。信乃のやうなく身を起し。細た燈火よりち對ひこかゆく末と
 来しことをあふ就く猶あり果敢る露の草枕旅の宿り小恩義の人を
 連係させんはあろゆは郷小大田が屈度の色ふかしのわら。加旗の
 の公羽ハ莊官許召とそれと甲夜過るまぐいまご還るまご俵れぬ人の夥牙て
 高嘯せし物のいさ。皆口がうまのあふる村雨の刀失せし。ひく日陰
 の花とのと調むむらりの病著小身のある果ハ老ふれし。緋の難義小及ふと
 竹の刀小伏くこれ死ん。豈誠ある人の親子を且くも苦めんや。よふ惜るぬ
 命あまども栗橋もく袂を今し額藏の莊助が傳も竹の刀本意あるん
 濱路も亦不便入玉椿の八千歳までと久後けく憑きて。うすうすのろを珠

更小恨やせん。歎死やせん。彼木のそと現八小丈吾資ある力を不覚小早る。
 短慮と後小のらんかも。虎へ死しと皮をとめ人も死しと名をそとせせ死魚き
 時の死ねる世小疎ましく恥まかり。ぬの尺八もこが為小弥陀の慈航の掉
 の歌調舞の菩薩の音楽致るゆその中へ成えもやり。期小至るバカを
 把るさむらりの力ハあらん。あつを覚期を究めける心も清しゆく水のぬ
 悔の只むら。特小面あり。先考する。霊脚送言を仇みせねと疎ちるをける
 愆より野心間者と疑し身ハ落人とあつ果く非命小終る。後まきと父祖の
 名を汚しとせん。不孝の罪ハ九ツの世と易るとも。貴ひる。是のそ末期の
 憾。そとも過世の悪報と解ふ。佛説はひハ煩惱有無を離る。自然心任
 せの死るも生るも皆命をゆきせ。あとのいへる。瀧の碎けくも。あつ
 難て肝向心の痛く返る。返る。いとも切る。杜夫の恨をありと外ぬも。知る

ちりちり尺八のちりちり吹遊む夜はるる五半輪の月小代るる扇挑燈を
 轎子の簾小照さうと引さうと外小あつりのあつ年の齡ハ只竹のよそぢあま
 みの孀婦之尚黒髪を惜けさうとあつ年の短髪元結田の髪挿も目立ぬ
 無地紹の羅衣小白帷衣を下籠前結せし縹子の帯小結副る韓組紅を
 柳の鬢小山鶏の雄の下虫尾の長庇向上く門小進近つれ物やうさんと呼
 門く樞戸をさうと引開き小文吾ハわりのひうらう。頭を擡估とさうとさうと
 ちりちり尺八の妙真さるるや甲夜過るる只一人牧何事あまうと
 ませしと問ハ微笑うち點頭ゆる吾侪のさるる沼菰と大八とぬと来りまど
 途もく暮んとさうと彼小乗しりれ吾侪も持病小血暈あつと
 轎子小昇と揺さうと歩さうと夜行を涼しよれさうとさうとさうとさうと
 後者俱せんさうと水入さうと推菟客時をさうとさうとさうとさうと

閑とむひねと他事さうと小文吾ハ今宵ハさるる折さうと来る人の斯
 まつとと鬱悒さうと白地小告ぐもあつとさうとさうとさうとさうと
 来りまどと透さうと上坐小勧めと軀と門の巨戸を内より廣く推開け轎
 夫ホハ土間小息杖衝立進入り。板席さうと框際まど轎子を横さる小昇居こ
 簾を直と掲揚さうとさうと沼菰ハ熟睡せし大八を膝小乗しり。縮羅の
 単衣緋の縹絆帯と段子の黒入茶の交野賽を片締し。照斑の玳瑁櫛
 箕鎌倉様小田舎備さるさうと十九りの園子りらの夜の鹿秋小も
 遭と別来し心の痛く色小さうと轎子よと中をさうとさうと揺覚されてあつと
 泣く大八を抱えさうとさうと背を敲著け家兄燄暑小恙さうと家さうと
 以よ健小さうとさうとさうと低る頭の病小撲地と落さる釵兒も別の櫛紅と
 うち歎く涙とさうと背向小さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

山の妙真を轎夫ホをこえ入りて。喃人よりや夜中の過戸とも吾侪は今宵退る
 う。その前面より杭根のわきより南を向く涼しくせん且く其知小侯てよこのふ
 皆さるるろびき轎子を外面に擡出し巨戸を礎と引せき辞しつら櫃戸を
 又あるより闇をける且く妙真も小文吾もうち對ひや。阿舅父まも臥
 房のりより軟堪るたまで火熱る小恙さくてもとをせよ去年まで夫婦
 とも孫をも神興洗ふ来しとども。このめ何中事の多くと出し子は、卒意
 ちるるは婢兒達の如くむと向言れ葉小花のあまとも小文吾の雨夜の月露ぬ
 疑念小眉うち擧め否家翁へ入小誘引とく真間へゆれくのも、還るは婢兒
 們も走百病し奥ゆ止宿の修験者のと折のころて人氣ぬく軟行態の疎
 さよ納戸へ絶く風も入且且くあめく相譚多又叔も婦人の夜行を厭くは世間
 をもゆく来ませり大なるぬ故そわめと向ひてさく妙真の衣領推

緩めく小膝を進め現推量せらる如くいとひひくたるるも凡貴れも
 賤れも男女のうもも親の隨意さるのるねと年来夫婦睦く孫立
 才中奉る母へ老樂幸あめと近死するもの人よ羊次れ今恥りた夫妻
 口舌の縛とより憎くぬ媳婦と離別の術と憎く不牙ある公の苦しと神
 ろるべしと誰かあらん。め成りつがいぬる日の八幡の相撲小房八が、お力不
 負さかりしを左ふ右機嫌のころけとと敵よへお沼井蘭が家兄之慰め
 う。この子の當惑一日二日と麻呂程何れいん房八も生涯相撲を取
 いとく額髪を剥落せ。昨夕俄頃又濱邊の拍擇和けあひ、お力方の截
 判如才あつゆわさめと根へ腹こちのかさまぬ前されころさ小房八も
 憤恨甚しく女房まこの確執の黒白を判るとく母が諫も用ひぬ短慮媒めハ
 去歳の秋古人ふるや今さく誰とく相譚ふめもさ。さよと人小送る

情由も告ぎ返さるるのめりわが母親の役も俱くまの熟も馴染て
 濃中を列衣くはるるえの葛の布縫合さぬ糸亭のうらぬの浮世の美理と
 丈夫の勝もぬ女子の甲斐なる可愛やお沼蘭を鼓蟬の鳴より外の樹も
 心の誠を知らるる甲斐も慰めく扶けて轎子に乗る折入が跡追て
 泣くハ理り母と子の別も成蛇が知させ牧推る袂を振拂さく出されせ
 知もせぬ四つとりの冬師走生との年弱めゆまご乳房をよさ
 ねば二葉の小草もその森の蔭さむとくいつて返育ん已に成ゆま合轎の
 乗もまのまのたれた外祖さる許とゆなく美衣さるるをこせはるん
 物賜ると餘念さる膝踊せ稚見の公ハ智恵さる聖平神乎門までま
 母親の膝椅子借く熟睡せ夢の浮橋中絶る歎を知ぬが歎死のひと涙
 の種も時さる小夏愛るの毎小生さる草とさるりぬ人思慮、女子の

秋縁返一又かへとも返さる難れ離別の情由さる小もあまの純もか
 小も執りさるるのぬとのひく酸鼻さる姑の言葉さ露を結ひさる沼蘭ハ
 よとぞ泣沈む小文五つとくちやうく嗟嘆の言詳る大家の口状大さ
 ありをぬる沼蘭ハ又さるるのひかるあまのゆら外も深は意味ハ
 わたやのうらそと向かす頭を擡女子のうら五障とさる三後とさるの
 何さるゆら良人ハ理さるとも情さるる四年以来声立くハ懲されとも
 心をも小も家の内風波立を取楫の朝さ夕まの船日記世さる業も人の
 小も任せぬさる暇さる馴住ひ川添の門の柱ハ朽るとも死さる出され
 一とさるのめ成さる飽もあまもせぬ中を去さる還る親里の園もさるん
 とら願うる西方の心さるの和さる月騒れ風雲の舊の峯上小もさるん
 ぬれさるる来涙の雨さる過てさる袖の乾れてん吾倚ハ撲き傷

十二
 山崎堂上



あやめ婦とゆき姑とゆき縁ありあがり本末遂ぬる産霊の約束事ゆき
あやめ人の心善も悪もうちつくちつくちのあやめ只鬼々死この婆が免
毛むすも疾ち死婦を追出せし人ゆりんこれも益の諄言り然るに
吾侪へ退りか沼菌へ陟れ心く病煩く親同胞小助勞を被りて夏
の夜の死くちくとも大八衣推脱し寝冷し風ひく煩くあやめをく
泣腫せし目を推拭く頭を擡幸來の山高恩宣りて孝行を竭し
ゆせむちくちくち別れしゆきをりゆきをり真夜中ゆりゆり郷ゆき
あやめゆきく還しゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆき共侶小惜む別を慰貌小又吹遊む尺八妙真八耳を倒し彼笛音ハ
鶴の巢籠焼野の雉夜の鶴九生し活物主婦の哀別親子の恩愛ゆきゆき
疎まるとせんあやめ別あやめ秋ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

免く小文吾小告別く立嶋の翅小遺き一滴濁さぬ水小任り見送る兄ハ
辞る妹もよと音ゆき泣く心細けれ繁枝の門の樞戸推開し妙真を外小
ゆきあやめと呼ぶ程小轎夫ハ遠く轎子をゆきゆきゆきゆきゆきゆき
やを促せゆきゆきゆき頭を掉廿二日の月ちゆきゆきゆきゆきゆき
夜ハ既小更そあやめ市川へや還るゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
あやめ吾侪小跟とくゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
町へといそがとも進まゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
露けき袖をうち合しゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

第二十六回
忍を破りく大田與山林戦ふ
怒成合と沼菌四大を傷害を
人さまゆき小志と道引ちくちか折均太五六鹹四郎も甲夜の送恨を復

さんとき古那屋の門小潘来り或る戸小耳をよせ或は戸郎よをさう祝け
燈燭あく声まえ時を早しと退る耳語のめら後方よりこころか
牙者わもん咎めまじと之入齊一睽迷ひく庇間よを背門のくあを隠
けるさ程ふ山林房八の母妙真ふ送る女房沼菫を去りかど彼方の回
答もかろ移る月又あめりわまが小文吾小對面し。昨夕の確執を果さ
更蘭を只むもまぶる戸小近づる。裡面の中成窺ふ小文吾の沼菫と
端居しうち歎く声。喻を声。竹と蕭中ふ竹のえり。その緯の越成よく推究
めく後ふしを裡面ふへめと尋思ら門の柱より成のけく身を敬て竊聞せり
かまると知もどく。沼菫の中を泣を禁め不慮のるよをこの刃の厄難
釜まさま還をせひひが何とまうしとくうん中甲斐文死の現女子とひひ
し。よ家兄よ死商量をせしと果敢くお成らるるを大八を納戸小臥さ

釜まさま成候侍らん鳴呼胸痛やと身を起せ小文吾吐嗟と立塞り中をれ
か沼菫へ何知へむとと辞せり。禁を呆れ顔をうち自戕り。あは狹狹
る物咎めまもまも末ても親の家納戸へむ小科をあたるといへせも果は頭を
うち掉り。縦親の家事とと留守まま兄が随はせん知るとや今宵へ庚申
守へま祈願のしあり。齊戒すわ親類でも他家もまあるのを留めま
況奥へ一歩も許さぬ関の戸を開く。心願を空しくせんやと敦圍あ死せら
う。只子舎小病臥せし。信乃と見せしと慢ふのひ黒むま涙漣と。そのま言
ゆる。今宵へその花妻あは秋人ま隠し。妹小隔のあぶ死むと死心ど
進め眼を睜し尾陋の推量奇怪祈願の外小物も。一旦鎖ら出居の関成
疑。許まね強く納戸へあんとるま。齊戒を障身ま。是悪
魔の所行に似たり。ゆがらも置とあるま。不便ま。親子共侶擔下小

立ち夜を曉せむとぞと罵懲り。搔觸を引らる。戸口小推おらせむ。
 ありと叫ぶ母の声小驚覺る稚児も共音立ても泣叫ぶ小文五のさりそと多か
 る。共侶小弱多心を鬼小う泣声奥へせせと樞戸礎と踢用を推かえ
 と程小外面よりさかきく。沼菡が肩尖推戻し内り肉小入るのあわ小
 文吾の且成信と見え房八も軟小文吾軟何とありま真夜中何とも知
 ころ確執の後段別ふの死ともあわ。他人小入るも潔白く果さん為よ夜とめて
 そまが来る軟あつるま。と送の問答由あせむ。答る房八も樞戸礎と引盦
 たる。當下小文吾の舊の席小退れ。一刀取。傷小引著俟間あせ房八の拵
 光も長腕刀小四下も陟と裳を褰て績て進む前房の正中。小文五がとり
 近く向騰あふと高踞膝突つ。疾視する。沼菡もひひるも更闌
 する。良人の執刀ひ見も有敷小氣色。心の底を汲み。うち騒ぐ。四月の荒川磯

ある浪より危き一期の浮沈和論る。よもあ泣小噴上る大八を横抱抱て合
 まる。乳房も細る。百里の苦勞。後小立。退れ。心届ぬ片も葉小せん。まもる
 行燈を辟のりも小推退け。そと搔起も燈心の丁子頭もそとめめる。
 日まや滅ん。うち歎。房八のまを。んもあつ。腕を扼。声をあや。立小
 文吾。和郎も男子。う。榊崎も。踏。恥。辱。辱めても窘め
 ても。あひのる。臆病者を。敵。小取。ん。大人氣。あ。ま。此。二。ん。も。ゆ。も。け。い
 る。あ。ま。さ。く。女。房。を。去。ま。も。渠。が。所。藏。の。衣。裳。調。度。を。ま。返。さ。み。の。後
 日の異論。奥。齒。小。物。成。挟。く。の。慾。小。轉。入。も。い。ん。そ。成。返。さん。と。と。癪。小。あ。の
 物。檢。め。く。受。納。め。と。い。ん。を。小。文。吾。や。あ。ま。何。更。中。ん。と。あり。ひ。小。沼。菡。が。衣
 裳。を。返。さん。と。軟。入。騷。小。更。闌。る。今。宵。を。ま。小。限。る。の。久。星。表。小。妙。真。刀。祿。小
 答。一。こ。が。親。ま。ま。還。る。ね。ど。枉。と。妹。を。留。め。ま。小。情。あ。る。姑。の。面。小。顧。す。志

両方もてしと壤も堅まじりて成るのまふの果ては白月の火も滅ん
 睦と相譚ふと親を救ふとを多るは是れ小あしとる幸ひの又あふりやと氣
 向く彼方此方を和諭の声うちり泣潤きま簀子の下の蟬も雲時その音
 とめけり。小文吾ハ今さふ事を好むあふねども。さう移る怒む房ハ小既小
 大事を知りてく忍と親の歳刀小被紙索ま今を厭ふ小惶わん
 足躡身の息あつ程ハいさ彼人を處多げきとさふ此も退き立る
 と刀の柄を握詰る指の汗小鞘釘も濕る可え當下房ハやましく焦燥
 ありえりて女子の裁判泣とく口説とく宝の山小入とさうさ
 けり。沼蘭もその子を抱るま小横轉輾とくと泣く房ハいさ紙物ともせど
 信乃ハまさしく子舎ゆと進む前面小小文吾が立塞るを抜打小巻尖く丁と替
 刀を鐔りく受留る紙索を断る小文吾ハ今を仇する堪忍の二字も反故と
 恨の刀尖抜ありつ丁々と劍を削る送の大刀風四下を蹴立と戦さう沼蘭ハ
 中う身起しと息絶る。あふのふせんぬやと泣くさ
 兄と兄弟と良人ハ一上二下と砍結びる生死の際この子もいと惜。彼首も危し
 夫子ゆいまも子も殺さまてく。さう月ひとさふ怒小生る甲斐ある火宅の苦さ刀の
 下小玉の緒の絶ちが絶すと忽地小志を勵とかれ抱ゆる大八を撲地と投捨
 身を起さ哀とあまらと此も擬談せむ。情あり短慮え物もねひさふ
 らん止りあと呼みと打ありさ白刀の中へ入るとは。小文吾ハあふり
 けと疾視とよせも立ねどあふらと捕前禁る女の念力。身を投りて良人の
 袂小携るを透ささめゆり落さ房ハ怒らる眼を反と碍とんと蹴倒せは并撥矢と

信乃ハまさしく子舎ゆと進む前面小小文吾が立塞るを抜打小巻尖く丁と替
 刀を鐔りく受留る紙索を断る小文吾ハ今を仇する堪忍の二字も反故と
 恨の刀尖抜ありつ丁々と劍を削る送の大刀風四下を蹴立と戦さう沼蘭ハ
 中う身起しと息絶る。あふのふせんぬやと泣くさ
 兄と兄弟と良人ハ一上二下と砍結びる生死の際この子もいと惜。彼首も危し
 夫子ゆいまも子も殺さまてく。さう月ひとさふ怒小生る甲斐ある火宅の苦さ刀の
 下小玉の緒の絶ちが絶すと忽地小志を勵とかれ抱ゆる大八を撲地と投捨
 身を起さ哀とあまらと此も擬談せむ。情あり短慮え物もねひさふ
 らん止りあと呼みと打ありさ白刀の中へ入るとは。小文吾ハあふり
 けと疾視とよせも立ねどあふらと捕前禁る女の念力。身を投りて良人の
 袂小携るを透ささめゆり落さ房ハ怒らる眼を反と碍とんと蹴倒せは并撥矢と



男児を死にせしむ吾侪を女婿小志多ひぬ。ちて房小志歳より通家小志。房八が
 舅丈五兵衛へ那古七郎が弟ありとぞ。今歳にめく。灰小志ぬ渠その婿を
 の雙言あり。杜木朴平が孫ありを侍人もや。あつてその女児をそ阿容こと
 房八小舟眉まぶたを復さる疑ひあり。あれねが口舌もあつて怨を
 愚しく好を結ぶ。終小志孫の患を送さん。さぶとく沼菌が怜悧死人も羨む
 媳ありふのちを奉る。孫小志乳房を放さうと去せんといひ。思ひ死
 小志ふん那古が弟と知む。通家小志。悪因縁孫が妻の人のまき
 ぬも三世の後まぐ。怨成惹く。彼刀祢を。神餘那古の祟欽と多ひ。屈一は病
 煩多くと。死期ちく。あまふり人の怨を解んと。陰徳小志。おれたの。
 房八の親小代。祖父の為。汚名を雪め。彼舊怨を釋。とあふ。寔小志。よ
 那兒孝行する。且房八の祖父小志。俠氣あま。武藝を好み。義のあつた。

命も惜ま。戸山も心を雄く。子に諫奨。と竊小志。言せられた。
 父の義理。惺惚さる。既已かくの如く。親小志。及。その子と。志と嗣
 ざん。死や。と。起。祖父の汚名を雪。入。為。松木の。木。除。下。さる
 木字小相合。み。山林と名告る。その比。あ。さ。小志。より。が
 舅丈五兵衛。親子の為。ゆ。人。異。志を。後小親の。言。明。地。小
 告。と。折。も。ち。實義を。あ。樹。も。さ。ひ。ぬ。日八幡の。相。撲。へ
 和殿と。目。星。小。指。修。験。の。幕。小。任。と。め。吾侪へ。絶。く。勝負を
 ぬ。も。技。も。力。も。和。殿。及。ぶ。く。も。あ。さ。も。怪。我。小。も。勝。と。念。の。果
 しく。負。と。何。で。な。れ。と。成。ふ。く。と。の。立。小。娟。の。め。さ。う。ら
 の。か。く。き。の。め。祇園會の。神。輿。洗。を。観。び。と。ま。の。濱。小。牙。と。遊。び。山。獄。父
 兵衛を。と。訪。人と。思。ひ。入。江。橋。と。渡。る。程。小。嶽。父。と。遙。小。水。際。あ。る。蘆。分。船。の中。小

ち。怪しむ。而個の仕位と。うち相譚あふゆえ。端き。ゆも。左。その。や。り。小。
 近づれ。ち。ち。を。竊。せ。し。け。る。小。犬。塚。犬。飼。値。遇。の。奇。譚。和。殿。も。亦。その。相。
 似。ち。玉。ま。え。痣。さ。え。わ。り。や。成。ゆ。く。小。ま。ま。と。く。感。激。し。今。更。知。る。小。女。ま。ま。盧。
 原。小。躲。ひ。く。獨。情。お。り。中。う。こ。ま。亦。相。似。ち。玉。と。痣。と。あ。る。る。彼。人。の。隊。小。
 へ。く。世。の。豪。傑。と。い。は。れ。ぬ。成。過。世。こ。ろ。こ。ろ。め。る。ま。ま。義。を。結。ん。と。願。ふ。と。も。許。
 さ。ん。死。す。わ。る。同。盟。の。浅。へ。協。志。た。當。所。へ。千。葉。の。采。地。あり。許。我。の。御。所。の。御。方。
 ち。り。犬。塚。犬。飼。穿。鑿。せ。し。ま。す。難。義。小。及。ぶ。と。わ。る。竊。小。男。又。力。を。勤。し。
 こ。が。性。命。を。隕。ま。と。も。その。危。窮。を。救。げ。ん。や。あ。ら。ん。小。の。父。の。送。言。を。果。
 さ。ん。の。只。この。時。小。あ。不。と。竊。よ。い。ひ。決。め。る。ゆ。く。その。日。ハ。暮。て。彼。人。の。
 古。那。屋。へ。と。く。わ。の。翁。小。伴。ま。る。和。殿。ハ。留。り。ま。す。件。の。船。を。推。流。し。血。つ。た。
 衣。も。背。負。ひ。立。う。と。ん。と。せ。ま。る。小。ぞ。あ。ま。ま。小。送。憾。を。不。卒。と。め。の。い。ん。と。盧。

原。より。立。出。せ。も。の。ひ。く。小。小。恍。惚。小。引。笛。一。を。和。殿。ハ。癖。者。ち。り。と。と。振。拂。ふ。
 ち。勢。ひ。小。の。ひ。く。呼。も。か。け。ら。ま。且。挑。争。小。程。小。吾。倚。ハ。膳。を。い。く。打。と。く。
 倒。る。間。ハ。ち。ち。ち。和。殿。ハ。走。ま。り。跡。小。送。せ。麻。衣。わ。り。倘。他。人。小。拾。れ。
 る。歎。危。其。知。小。起。ら。ん。と。い。へ。小。躬。と。る。わ。び。く。更。闌。と。宿。野。小。還。り。母。小。
 ま。ま。告。げ。る。小。犬。塚。生。追。捕。の。ま。ま。莊。官。より。徇。ら。ま。り。當。下。小。
 又。ち。の。ち。こ。が。男。ハ。客。店。あり。彼。人。を。舍。藏。ふ。と。も。人。の。出。入。ま。ま。小。程。も。
 る。顯。ま。す。犬。塚。犬。飼。の。が。ま。ま。あ。ら。親。子。も。罪。せ。れ。ん。と。い。は。れ。と。今。更。小。
 義。を。結。ぶ。と。人。を。出。遣。る。べ。く。も。あ。ま。も。評。詮。今。こ。ろ。命。成。隕。し。其。知。は。危。
 窮。と。救。つ。と。も。竟。脱。し。と。か。へ。こ。の。入。江。の。盧。原。ま。ま。つ。く。と。闕。規。小。
 彼。犬。塚。が。面。影。ハ。こ。が。面。影。小。似。ち。ま。ま。ち。り。こ。の。頭。を。り。と。犬。塚。生。の。首。
 級。と。偽。り。許。我。の。ち。使。小。遞。と。り。ま。嶽。丈。父。小。出。崇。も。ち。犬。塚。生。成。落。し。ち。り。

のりころ中宿小勉ちゆうしゆくせうけんとく。竊小母せうぼの末すえなるなり侯こう々々云云と密報ひそくほうて彼骨相圖かこつさうずを
 處ところ与よせし和殿わだんが心を騒さわく今宵こんしゆう替かえん為ためり死しさふゆり甲夜かやの間まを
 背門せいもんの辺へ小潜せうせん来きく犬塚生いぬづかせいの大病おほいびやうも和殿わだんが苦心くしんもよく知しるを願ねがふ河間わまき
 大田殿おほのたにだんが頸取くびとりく役やくふとて山獄父やまがくちちちの縲わづ縄なわと犬塚生いぬづかせいの危あや窮うきうを救すくふ手段しゅんげん
 めぐせぬ怨うらみを釋はなす一期いちごの切きりく昔むかし杣木そまき朴平はくへいの定包じやうほうを
 移うつんとく領主りやうしゆを犯とがして刺那古七郎せんこしちらうを殺ころす且かつその師しも故主こしゆたる
 金碗氏きんわんしふもこの故ゆゑ小腹せうぼくを切きせしゆのあれも今いまその孫房まごふさふさ八やち云云の義烈ぎれつふ
 よるも孝子かうし義男ぎなんの冤枉ゑんかうと山獄丈やまがくぢやうの縲わづ縄なわを釋はなす死しと口碑くちひ小送せうそうしゆの
 らが祖父そふぢの汚名けうめいを雪ゆむべく父ちちの送訓しやうくんも空あやしくせむと死ししく栄えいある日ひが飲のび
 百歳ひゃくさいの壽じゆを保たもつ富貴ふきの人ひととあらんやとすはふはるあはれや身みの
 秋あきひふ就つくち不便ふべんあらぬ沼ぬ藪い大八おほやち親子おやこ三人さんにんがひる日ひふあはれ所ところ命いのちと價あはれ
 亦是また祖父そふぢの惡報あくほう汝なんぢ妻子しよしふへ一毫いちごうも意中いぢゆうの機密きみつを告つげまはれ忍しのび後のちと
 去さるとのそとあらくそとあら恨うらみとて必死ひつしを穴あなめく沼藪ぬい八年はちねんも
 二十にじゆ小足せうそくとて日ひがあらん後のち熱あつ小後家せうごけまはるん便べんさる日ひとて事こと小假せうか托たく離り
 別べつせらるる渠みちがぬるんとぬひ故ゆゑ小つともるゆめてあせしを悔くしむ
 かうろべと豫よより悟さとるゆせう返かへま死し大八おほやち小隸せうれきと遣やりし渠みちが成長せいぢやうる
 後のちまぐ外ぐわい猶父なほちち小教せうけう三さん月げつを教しふ死しるゆひの仇あひるゆめて過失かふしといひあはれ
 妻つまをも子こをもふふけく殺ころして竟つひ小身せうみを殺ころす輪りん回かい心しん報ほうかまふふあはれ
 けるゆの飲の犬いぬ大田おほのたに殿だんこの惡縁あくえんを結むすぶ故ゆゑ小沼藪せうぬいが枉かた死しハ夫おとこの餘殃あまのりやく山獄父やまがくちちちの勢せいも
 和殿わだんの憾うらみも想像さうざう々々面目めんめく許ゆるす多おほと血ち小深せみし左ひだり身を抗あがるかろがむまて小
 心の誠まことうち諦あきらま備べい稀まれる孝順かうじゆん郎らう義深ぎしん瘡さう又また屈かせぬ長物ながもの語こと小文せうぶん五耳ごみみを
 側そばに齋さいを拊ふく感嘆かんとんの目をあはれ死しく涙なみだを拂ぬひあひるる山林さんりん和殿わだんの親おやの

亦是また祖父そふぢの惡報あくほう汝なんぢ妻子しよしふへ一毫いちごうも意中いぢゆうの機密きみつを告つげまはれ忍しのび後のちと
 去さるとのそとあらくそとあら恨うらみとて必死ひつしを穴あなめく沼藪ぬい八年はちねんも
 二十にじゆ小足せうそくとて日ひがあらん後のち熱あつ小後家せうごけまはるん便べんさる日ひとて事こと小假せうか托たく離り
 別べつせらるる渠みちがぬるんとぬひ故ゆゑ小つともるゆめてあせしを悔くしむ
 かうろべと豫よより悟さとるゆせう返かへま死し大八おほやち小隸せうれきと遣やりし渠みちが成長せいぢやうる
 後のちまぐ外ぐわい猶父なほちち小教せうけう三さん月げつを教しふ死しるゆひの仇あひるゆめて過失かふしといひあはれ
 妻つまをも子こをもふふけく殺ころして竟つひ小身せうみを殺ころす輪りん回かい心しん報ほうかまふふあはれ
 けるゆの飲の犬いぬ大田おほのたに殿だんこの惡縁あくえんを結むすぶ故ゆゑ小沼藪せうぬいが枉かた死しハ夫おとこの餘殃あまのりやく山獄父やまがくちちちの勢せいも
 和殿わだんの憾うらみも想像さうざう々々面目めんめく許ゆるす多おほと血ち小深せみし左ひだり身を抗あがるかろがむまて小
 心の誠まことうち諦あきらま備べい稀まれる孝順かうじゆん郎らう義深ぎしん瘡さう又また屈かせぬ長物ながもの語こと小文せうぶん五耳ごみみを
 側そばに齋さいを拊ふく感嘆かんとんの目をあはれ死しく涙なみだを拂ぬひあひるる山林さんりん和殿わだんの親おやの

送訓を守りて、舊怨を釋ん為身を殺し、仁をもち心操を微妙けき。
 和殿の祖父が謬て犯せし罪を重くとも子孫三世の今ゆきその汚名を
 雪る孝順和漢小ヨメくわぶい大塚生の面影、和殿とよく相似たる
 のうき累世の主君の為ゆも身を殺しその死小代る忠臣のいと稀なるゆ
 和殿とよき通家うき大塚生の相識るも且八幡の相撲より快くは
 見えうき窮難今宵小逼さとも外小とも真愛苦を生口くその智慧を借んと
 欲せむ況身うりあるかど企及ぶべしあわねん切なひけさるる今
 由らるる資をばく父の纒繩を解くよほふも、同盟の士を救ふ便点
 小もあさるる夏意外小ゆと秋く又哀さき下し人殺し人を救ふ
 素よむと、願ひ小わむむ大塚生も如此るらん、今更ふ推辞てその
 意小従ひとも水は懲り湯を辞ま如く和殿をよ小拘死さす、古果小はるる見と

いふへせん又沼菖と大八が枉死のいやく意外の殃哀傷の涙胸小盈送憾腸と
 弟とゆどもみる命の致さともうち歎くのせんまざるのさかき妹が
 刀を犯し身を殺せしも拘死さす、家小相傳る破傷風の奇方
 あり男女年まほ少壮の、鮮血各五合を取て合しその瘡小洗き洗へる
 死を起し生小回しその瘡も亦愈ると常の塵を拂わがふ、百發百中
 術む壁言ハ養由基が百歩を隔ち柳葉を射つが如し便是、伯父
 あり、那古七郎の傳方あるとと父小口授せしとと求め得べき薬劑
 なる後が施し、大塚生のその曉よ破傷風小よと命
 危し、故小大飼生も武藏の志婆浦小良薬あり、そ我求んとく潜
 中、今朝も彼知へ赴き、道遠る直ぐのまご還らむと緞和殿の便
 点、仕く今宵の危窮を脱すとも、彼人の命終るも亦何の益あらんされば

沼菡が枉死ゆわくく圖をど男女の鮮血を獲り不幸の中の幸救天欽
 人欽欲はる所只塞翁が馬小似たり是はた大塚生の孝心義胆世提
 れを憐るる神明佛陀の冥助ふわど亦何ぞや心安るは山林和殿と
 日とと前世の相殺しる雙敵今の舊怨氷解し恩義へ千引の石より
 重るる功德をろく口碑小伝く義烈の龜鑑ふせるとんやとんわく迄
 逞しれ志氣ある丈夫をよりや彼玉のそとも又つるむるの瘥へるとも日
 同盟小請加る久後さ小憑しうらん小親子三人が共侶ふら小命を預
 まる恨のうらみち賢小く且雄く死大家あるとも乃とつる
 いやちなく頼折く歎死多ん痛しあよ嗚呼何とせんとむる小玉はふまむ
 愛哀苦浮世へうや丑云の鯨音遠くはるのいとむあはれをそん小けり。

里見八犬傳第四輯卷之三終

